

19 世紀末から 20 世紀初頭のイギリス女子身体教育と日本への伝播 —女性教育者の視察・留学と実践—

香川せつ子 (津田塾大学言語文化研究所)

明治以降の日本の教育は、理論と実践の両面で西洋式学校教育をモデルとして発達した。本発表では、西洋モデルの女子教育が文部省により制度化されるのとは別の経路が、女性教育者の海外渡航を通して開拓されていたことを、身体教育を事例に考察したい。日本での女子体育への関心は華族女学校での運動会など 1890 年代からみられ、1895 年の高等女学校規程では「体操」が教育課程に導入された。1903 年に、「女子の生理衛生体操科」を目的とするアメリカ留学から帰国した井口あぐりを指導者として、女子高等師範学校に国語体操科が設置された。さらに 1912 年には同校助教授二階堂トクヨを、「体操」を目的にイギリスに留学させている。本発表では、イギリスの女子身体教育の日本への伝播を、女性教育者たちの視察・留学を通して検討する。

イギリスにおける近代スポーツの成立と海外波及、それを支えたパブリック・スクールや大学でのスポーツの隆盛とアスレティズムは、多くの外国人教育者を魅了した。1898 年に渡欧した下田次郎は、『西洋教育事情』(1906 年)で、英国に関する記述の半ば以上をクリケットやフットボール等多様なスポーツに割いている。同時期に渡英した日本の女性教育者が一様に注目したのが、女子中等学校におけるスポーツと身体運動である。イギリスで女子中等教育が普及するのは 1870 年代以降だが、身体教育は知育による精神的緊張の緩和と健康維持のために先駆的学校で導入されていた。1880 年代に入ると、ソーシャル・ダーウィニズムの思潮と大英帝国の膨張を背景に母性強化の観点から身体教育が重視され、マルティナ・オスターバークにより女性体育教師の養成が始まる。多くの女子中等学校が、体育を知育・徳育と並ぶ教育方針の柱としていった。

19 世紀末に西洋女子教育の摂取のために視察や留学をした女性教育者たちは、女性の身体強化と能力開発が近代国家の基盤であることを実感し、体育を日本の女子教育で重視することの必要性を主張した。その具体的な例を、華族女学校の下田歌子(1893-1895 に在英)、女子高等師範学校の安井てつ(1896-1899 に在英)、さらに安井の師であるエリザベス・P・ヒューズ(1901-1902 に在日)の著述のなかにみることができる。20 世紀初頭の文部省による二階堂トクヨの派遣は、女子体育を支持する世論を背景に、高等女学校での体育指導の本格化をねらいとしていた。

本発表では、まず 1870 年代以降のイギリス女子中等教育における身体教育の発展とその社会的・思想的要因を概観し、次に 19 世紀末における下田と安井の視察・留学と女子身体教育との接点と影響を探り、最後に二階堂トクヨの身体教育実践にみられるイギリス女子教育固有の要素を考察する。